

船津胎内樹型

10 世紀に発生した剣丸尾溶岩流が富士山の北側に残した岩盤には、大小 43 の樹型があります。これらは船津地域にあるため、船津胎内樹型として知られており、富士山の世界遺産登録においてもこの名前で資産登録されています。最も大きいものは、複数の隣接する木々から形成されたことから、非常に長く複雑な形をしています。18 世紀以降、これは富士講の巡礼者たちにとっての信仰の場となりました。今日、この樹型は船津胎内と呼ばれています。

丸藤講の創始者、高田藤四郎（1706–1782）は、1770 年頃、富士講の巡礼先に船津胎内を加えた最初の人物と伝えられています。高田は自身の師で偉大な富士講の指導者であった食行身禄（1671–1733）に導かれてこの洞穴を発見したと述べました。

後に、この場所には他の富士講によって仏像や碑が置かれました。入り口のそばに置かれた高田自身の木像は、今でも同じ場所にあります。やがて、船津胎内の入り口の上に無戸室浅間神社が建立されました。

船津胎内は年間を通して参拝できます。同地には神社に加え、近年つくられた河口湖フィールドセンターもあります。